

平成22年2月

ばあちゃんの熱い風呂

校長 渡辺 隆

インフルエンザがピークのころ、ずっとマスクをしていました。マスクをすることが、こんなに息苦しいものだとは思いませんでした。酸素が入ってこない気がしました。ところが、しばらく経ったとき、息苦しさなくなっていることに気が付きました。慣れたのです。

子どものころ、私は、ずっとばあちゃんと風呂に入っていました。その熱いこと。体が真っ赤になりました。いやでたまりませんでした。しかし、いつの間にか、熱いと感じなくなっていたのです。風呂上がりは、いつもぼかぼかでした。

皆さん、私たち大人は、今、大切な子どもたちを、大切だからこそ、熱い風呂に入れる努力をする必要があるのではないのでしょうか。次に、当校の宇治カウンセラーから入手した資料を載せます。

「ふにゃふにゃになった日本人」（マークス・寿子 著 草思社）から抜粋

好きなことしかしたくないという子どもたちの態度は、学校の勉強だけでなく、家庭にあっても同じである。子どもが嫌と言えば、親は強制しないから、好きなものだけを食べる。部屋の掃除は嫌だからしない。小さいころからやるべきことがあっても親がちゃんとやらせない、やらなかったら叱るというしつけをしていないのである。

（中略）

子どもに本当に好きなことがあって、そのためなのであればまだ救いもあるが、実際には、努力しなければならないこと、少しでも面倒くさかったり疲れたりすること、自分の思いどおりにならないことは嫌だということなのだ。嫌だといえればそれで通ると子どもたちが思いこんでしまったのだ。

たとえば、家族みんなで見ているテレビの前を子どもが平気で立ったり横切ったりしたとき、昔であれば、みんなの邪魔になるから座りなさいと言ったものだが、いまの親にそんなことは期待できようはずもない。また、子どもが親や先生に向かって乱暴な言葉を使ったときに、そういうことを親や先生に向かって言うものではないと注意しなくなった。いくら乱暴な言葉を吐いても、近ごろの親は黙っている。子どもが何でも自分勝手にできるということを、親が容認しているのだ。（中略）

そしてもっと問題なのは、それを学校にまで拡大していることである。学校でも自分のやりたいことしかなくなり、ちょっとでも人に譲ることは嫌だ、自分の欲しいものは全部自分が持つ、人に迷惑をかけてもそれに対して何も感じない。しかし、それでいながら、人から何か迷惑になるようなことをされると今度はすぐに怒り、ムカつくと言ったり、カッとなったりする。

私も2児の父親です。実に耳の痛い話です。皆さん、子どもの本当の幸せのために、苦勞させませんか。我慢することを教えませんか。私たち大人が、子どもが乗り越えるべき壁になって、子どもたちを成長させようではありませんか。

3年生諸君へ

卒業おめでとう。経験はみんな財産だよ。つらいこともトラブルでさえも、きっと後から生きてくる。涙の数だけ強くなれるよ。明日はくるよ、君のために。